

ホッケー競技における傷害調査

A study about injuries of the hockey players

1K04B243-2

吉田 真弓

指導教員

主査 福林徹先生

副査 内田直先生

緒言

ホッケー競技は欧州を中心に世界ではメジャースポーツの一つとして挙げられている。しかし、日本ではマイナースポーツに甘んじているというのが現状である。現在、女子日本代表が北京オリンピックの出場権を獲得するなど、日本のホッケーレベルが高まる中で、競技力同様ホッケー競技の医学的な研究についても積極的に調査を行いそれらの情報を発信していく事が求められるのではないかと感じている。しかし、これまでに日本におけるホッケー競技に関する研究としてホッケー競技の傷害に着目した研究はわずかしかない。本研究では、質問紙による調査法を用いて、傷害部位、受傷機転、傷害発生時の活動状況、グラウンド状況、重症度、傷害名を集計し、ホッケー競技における外傷、障害発生の実状を把握することを目的とした。

対象及び方法

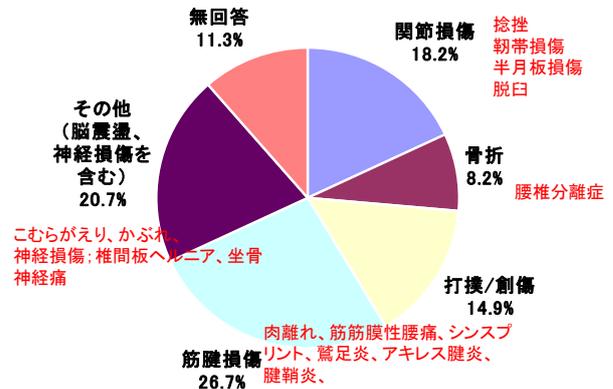
2007年7月から11月の期間で、関東学生ホッケー連盟所属の大学体育会ホッケー部697人、関西学生ホッケー連盟所属の各体育会ホッケー部508人、北信越地方の大学の選手73人、東海地方の大学の選手28人、高校ホッケー部760人の計2066人に対して質問紙調査を行い、うち有効な回答の得られた人670人(回収率32.42%)について集計を考察した。関東学生ホッケー連盟に所属するチームには質問紙を各校へ直接配布した。関西学生ホッケー連盟、東海地方、北信越地方の大学、高校生のチームは郵送調査法を用いた。

調査項目は、年齢、性別、ポジション、ホッケー経験年数、傷害種類、部位、受傷機転、受傷場面、サーフェイス、重症度、傷害対処・予防法、防具の使用状況で、原則自記式の選択式とした。統計解析にはSPSSを用いたt検定、一要因分散分析、 χ^2 検定を行い傷害の特徴について検討した。有意水準は $p < 0.05$ とした。

結果

現病歴が「ある」と回答した選手は272人(40.6%)おり、約4割の選手が何らかの痛みを抱えながらプレイしていた。1人当たりの現病歴の件数は平均 0.65 ± 0.98 件であった。既往歴が「あった」と回答した選手は427人(63.7%)おり、約6割の選手がこれまでにホッケーをする上で身体に何らかの痛みがあったと回答した。1人当たりの既往歴の件数は 1.55 ± 1.91 件であった。

傷害の種類 (赤字は選択例に挙げたもの、記述回答が多かったもの)



全体の傷害件数1484件の傷害分類の内訳は、多かった順に筋腱損傷396件(26.3%)、関節損傷270件(18.2%)、打撲、創傷221件(14.9%)、骨折122件(8.2%)、その他307件(20.7%)、無回答168件(11.3%)であった。

傷害を予防するために何らかの策を講じているものは670人中148人であった。

考察

今回の調査では、筋腱損傷は腰背部に最も多くみられた。はホッケー競技特有の前傾姿勢を強いられる。これにより腰部にかかる継続的な負担が筋筋膜性腰痛をひきおこすと考えられる。続いて多く見られたのは関節損傷であり、足関節に多く見られた。骨折は手部を含む上肢に多くみられた。これはプレイ中にボールやスティックが手に接触する場面が多い事によるものだと考えられる。ホッケー競技で使用するボールは硬化プラスチック製で非常に硬く、当たった際の衝撃が強いため損傷の程度が重くなると考えられた。また、男子では女子と比較し、ボールやスティックとの接触が受傷機転となった損傷が多く、打撲・創傷の割合も女子より男子の方が多く見られた。傷害を予防するために何らかの策を講じているものは670人中148人であり、傷害予防に対する意識が十分でないことが推察された。

結論

傷害調査の結果、腰部の障害が多いことがあげられた。ボールやスティックとの接触による損傷がホッケー競技における特徴としてあげられた。また、傷害に対する意識付けの必要性が示唆された。